

## VIII まと め

千歳市オルイカ 2 遺跡は、千歳市街地から北東に約 6 km、馬追丘陵の裾部の標高12~15m付近に位置する。平成14年度に3 230m<sup>2</sup>、16年度に5 500m<sup>2</sup>を調査した。その結果、特にアイヌ文化期の住居群（コタン）の跡であることが確認された。また、札滑型細石刃核を含む白滝産黒曜石の旧石器ブロックが検出され、原産地から遠く離れた「消費地遺跡」としての様相を呈している。

第Ⅰ章 - 4 や各章の概要と記述が重複するが、各時期の遺構と遺物について整理し、まとめとする。

### 1. アイヌ文化期の遺構と遺物について

#### (1) 「オルイカコタン」の特徴

##### a. 地理的環境

当時のオルイカ 2 遺跡付近は、東側の丘陵部を背景に、西側にはオルイカ川の氾濫原が広がり、北西側には古砂丘の丸子山をはさんで湖沼（オサットー）が広がる光景であったと推察される。

18~19世紀の記録類には、「イザリ」から「シコツ」にかけて、つまり現在の恵庭・千歳市街地側はコタンの様子や数など比較的細かく記されたものがある。オサットーをはさんだ馬追丘陵側は記録類から当時の様相を探るのは困難であるが、近年の発掘調査により馬追丘陵側でも少なくとも樽前 a 降灰期以前の活動の跡が検出されるようになった。北約 1 km にあるチブニー 2 遺跡、さらに北約 1 km にあるキウス 4 遺跡でも平地住居や建物の跡が検出されており、これらのコタンが同時に存在したわけではないであろうが、「オルイカ」（川尻の橋）をわたり馬追丘陵裾部に沿うコタン付近を通る道がある時期から存在した可能性がある。

##### b. 全体配置の特徴

検出された遺構の内容は、柱穴283基、焼土・灰集中62ヵ所、カワシンジュガイ集中 7 カ所である。それらの組み合わせにより平地住居跡 9 軒、建物跡 5 棟、杭列 4 カ所、焼土群 4 カ所を確認し、単独の柱穴は30基、焼土・灰集中19ヵ所、カワシンジュガイ集中は 1 カ所となった。重複遺構がほとんどないことや、単独の柱穴や焼土が少ないことから、比較的明瞭に検出できたものが多い。

平地住居跡や建物跡は、東から西にゆるやかに傾斜する調査区内に広範囲に分布している。全体的には等高線に沿うように帯状に分布しており、西寄りの標高13.0m付近（USD - 1・2）、南寄りの標高13.5m付近（USD - 3・4・5・8・9、USB - 1・2・4・5）、東寄りの14.5m付近（USD - 6・7）にある程度まとまっている。炉の検出面にわずかに差があるものがあり各平地住居や建物の構築時期に差があると考えられるが、同時存在の件数は不明である。

杭列について、平地住居跡 2 の北側および南側にそれぞれ二列が住居の長軸方向に平行して存在する。周囲との境界や干し場などの生活用の施設、儀礼のための施設などが考えられるが、他の平地住居跡周辺からは検出されなかった。

また屋外の焼土や灰堆積層の集中域について、灰送り場を想定して焼土群としてまとめた。これらは平地住居跡の西側にあるものが多く、平地住居跡の規模におおむね比例する傾向にある。平地住居跡 1 と FP - 1・2、平地住居跡 2 と焼土群 1 (FP - 5・6)、平地住居跡 8 と焼土群 2、平地住居跡 9 と焼土群 3、という組み合わせである。このことから焼土群 4 の東側、UPH - 24・25 (柱穴) から調査区外にまたがって相応の平地住居跡が存在することが推測される。

一方、オルイカ2遺跡調査区内では居住域が確認されたものの、墓域が検出されなかった。墓域はやや離れた位置にあるものと思われる。

#### c. 年代

平地住居跡などの構築面は、住居跡に伴う炉跡や柱穴、棒状礫などの遺物の大部分がⅢ層上面の直下付近で検出されたことから、Ⅲ層上面よりわずかに掘り下げた面と思われる。ただしTa-a除去後すぐに現れた灰集中があることから、Ta-a降下年代に近い遺構がある可能性がある。発掘調査の結果から、全体としては年代にある程度幅はあるものの、Ta-a降下年代の1739年より大きくさかのぼる年代ではないと推察した。

第VII章 - 1に放射性炭素<sup>14</sup>C年代測定値結果を掲載した。アイヌ文化期の遺構出土資料では、補正年代(1σ範囲)で390~120yrBP、暦年代較正(1σ範囲)で1470~1950ADの数値が得られた。確率密度の最も高い年代幅は、補正值で250~350yrBP、暦年代較正で1640年前後の範囲が多い。そこで17世紀にかかる範囲を抽出し表VII - 7(p338)にまとめた。同じ遺構で大きな年代差があるもの、Ta-a降灰期以後の年代のもの、分析試料による差など個々に検討を加える必要があるが、全体的には確率密度の高い範囲はすべての試料で17世紀にかかる時期を含んでおり、一部16世紀に時期をもとめられそうな試料もある(USD - 1・7および焼土群2・3の一部の資料)。

年代測定結果によれば、オルイカのコタンは16世紀中ころには営まれており、連続するかどうかは不明であるが、17世紀前半から中葉にかけて主体時期があったことが推定できるようである。

#### (2) 遺構の特徴

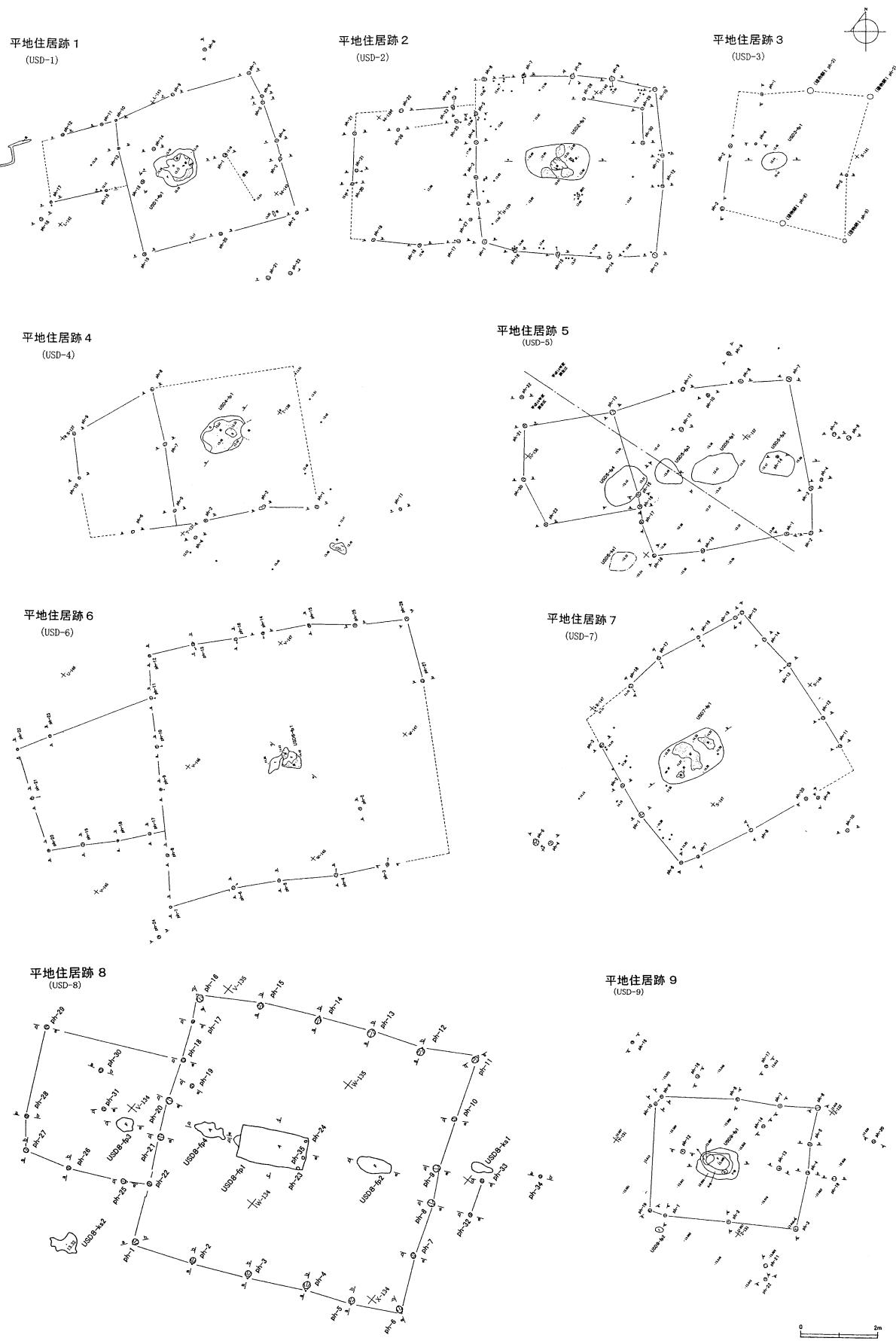
##### a. 平地住居跡(図VIII - 1)

アイヌ文化に関する記録(『蝦夷島奇觀』・『蝦夷生計図説』・『蝦夷紀行』ほか)や住居に関する研究などによれば、住居(母屋)「チセ」は東西を長軸とし、出入り口を兼ねた納屋「セム」が西側にあり、母屋の西寄りに炉「アペオイ」を設け、東側に上座、そして神が宿る窓「ロルンブヤル」があり、その屋外には祭壇「イナウサン」がある、という例が示されている。しかしこれはあくまでも典型的な例であり、実際の発掘調査事例では炉や柱穴の配置、納屋や棚などに相当する付属施設の存在など多様性があることが確認されている(小林2000・2002ほか)。オルイカ2遺跡の平地住居も、前述の資料に非常によく類似するものと異なるものとがある。

表VIII - 1 オルイカ2遺跡平地住居跡・建物跡一覧

遺構名	検出層位 (構築面)	標高 (m)	規模			長軸方位	柱穴			炉			備考
			長辺 (m)	短辺 (m)	面積 (m <sup>2</sup> )		本数	径平均 (cm)	深さ平 均(cm)	内傾平 均(°)	数	最大厚 (cm)	
USD - 1	Ta-a下	13.1	6.4	3.9	19.4	N - 74° E	18	8.1	37.2	*	1	17	Ⅲ層上位下位
USD - 2	Ta-a下	13.0	8.1	4.7	32.3	N - 90° E	31	7.5	46.2	*	1	22	Ⅲ層～Ⅴ層上面
USD - 3	Ta-a下	13.4	3.8	3.3	10.9	N - 83° W	5	7.4	39.5	*	1	11	Ⅲ層～Ⅳ層上面
USD - 4	Ta-a下	13.4	6.0	3.7	20.1	N - 80° E	11	7.5	32.5	*	1	11	Ⅲ層～Ⅳ層上面
USD - 5	Ta-a下	13.4	7.5	4.3	25.0	N - 85° E	19	7.7	34.5	1.5	4	15	Ⅲ層上位～下位
USD - 6	Ta-a下	14.4	10.6	6.6	56.0	N - 80° E	25	7.2	41.6	*	1	7	(Ⅲ層)～Ⅴ層上面
USD - 7	Ta-a下	14.2	5.2	5.1	25.5	N - 58° E	17	9.1	36.8	*	1	23	Ⅲ層～Ⅳ層中
USD - 8	Ta-a下	13.3	11.0	7.0	61.2	N - 79° W	31	10.0	52.3	6.6	4	21	Ⅲ層～Ⅴ層上面
USD - 9	Ta-a下	13.6	4.0	3.3	12.4	N - 86° W	21	6.6	31.1	1.2	1	13	Ⅲ層上位～下位
USB - 1	Ta-a下	13.5	3.9	3.1	11.4	N - 9° E	9	11.3	62.6	*			USD - 3と重複
USB - 2	Ta-a下	13.6	2.7	2.5	6.6	N - 48° E	6	*	45.3	0.3			
USB - 3	Ta-a下	13.2	4.5	2.0	*	N - 21° W	3	*	40.7	0.0			
USB - 4	Ta-a下	13.1	4.0	3.3	12.0	N - 49° E	9	11.9	57.0	1.1			
USB - 5	Ta-a下	13.3	4.8	3.4	12.9	N - 53° W	12	7.4	40.5	2.3			

\* .....計測値不明または困難なもの



図VIII-1 オルイカ2遺跡平地住居跡集成

・付属施設について、母屋のみのもの（平地住居跡3・7？・9）と「セム」が付属するもの（平地住居跡1・2・4・5・6・8）がある。平地住居跡2・5には壁を構成する柱穴のラインに平行して内側に小規模な柱穴が並んでいる部分がある。これは祭壇や寝床などを設けるための補助的な柱穴に相当するものと思われる。なお平地住居跡3は建物跡1と重複すると考えたが、建物跡1の周囲の補助的な柱穴であることも否定できない点を付け加えておく。

・方位について（表Ⅲ-1）おおむね東西を長軸とし正方位から15°前後の範囲におさまる。しかし、平地住居跡7は北東・南西方向に長軸をもち大きく異なる。立地状の制約は他の住居付近と大差ないと考えられ、植生などの環境や東方向へのこだわり方、時期の違いなどが考えられる。

・規模について（表Ⅲ-1・2）①母屋の長軸4m前後（平地住居跡1～5・9）②母屋の長軸5m前後（平地住居跡7）③母屋の長軸7m以上（平地住居跡6・8）のものがある。必ずしも同様ではなく居住人数などにより異なると考えられるが、大小を区別するならば①・②は小型の住居「ポンチセ」、③は大型の住居「ポロチセ」に相当する。また母屋の長軸と短軸の長さの比は平均100：93で、正方形に近い長方形になっている。一方「セム」はおおむね母屋の規模に応じているが、多様である。

・柱穴について（表Ⅲ-1）各平地住居跡から10～30基程度検出されている。「ポンチセ」の母屋を構成する柱穴が11～16基、「ポロチセ」が17～22基である。また母屋「チセ」に加えて、「セム」を構成する柱穴が3～8基検出されている。「ポンチセ」の径は平均7～8cm、構築面からの深さは平均30～40cmのものが多い。「ポロチセ」の平地住居跡8の径は平均10.0cm、母屋に限れば平均11.6cm（検出面で15.3cm）で、深さは平均52.3cm、母屋で平均60cmを超える。おおむね規模に応じた柱穴になっているが、中には平地住居跡6のように大型でありながら柱穴の径が小さいものもみられる。

柱穴の形状は、検出面（平地住居の構築面）から10cm程度（Ⅲ層からTa-cにかけて）は椀状あるいはろうと状、中間部はほぼ均一な円筒形で、先端が尖るものが多い。下部側面には材を面取りした跡が観察されるものもある（平地住居跡2・8ほか）。また柱穴は住居内側に傾いているものが多く、「ポンチセ」で平均1～2°、「ポロチセ」の平地住居跡8で平均6.6°、母屋では平均9°に達しており、特に住居の角にあたる柱穴では20°以上になっているものがある。ある程度の掘り方を設け、打ち込み杭により「外ふんぱり」で上屋構造を支えていたことがうかがえる。

・炉について、すべての平地住居跡において母屋の中央やや西寄りにある。ただし平地住居跡5・8は母屋東寄りにも炉をもち、「セム」の側にも灰混じりの薄い焼土がある。中心となる炉は灰が厚く堆積し、もう一方の炉は焼土主体である。何らかの役割・用途の違いがあるものと思われる。炉は厚さ10～20cmで、①炭化物や動植物遺存体を多く含む薄層、②厚い灰層、③被熱層があり、被熱層はTa-cに達しているものが多い。炉は橢円形を呈するが、上面において灰や焼土が長方形に広がっているものは、木枠などで囲んでいたと思われる。さらに明瞭な例として、千歳市トメト川3遺跡5号平地住居跡の炉があり、長方形で周囲に溝がある。炉の縁辺部には棒状の小さな穴が多数検出されており、食生活や儀礼の際に差し込まれた棒の跡と考えられる（平地住居跡8・9ほか）。また炉の東側の角に、作業台の跡や灯明台とみられる杭状の材が残っているものがある（平地住居跡1・5・8）。

#### b . 建物跡

建物跡としたものは、①田の字を呈する9本配列が2棟（USB-1・4）、②6本配列が2棟（USB-2・3、ただしUSB-3は推定）、③やや不規則な配列のもの（USB-5）がある。①の柱穴の径は平均11～12cm、深さ平均60cm前後で、②・③の柱穴の径は平均7～8cm、深さ40～45cmである。長軸方位は多様である。①は柱穴が太く深いえ、中央部にも太い柱穴があることから、高床の倉庫などの施設が想定される。それに対し②・③は細い材でも耐えうる小型の建築物が想定される。

### c . 灰送り場

平地住居の炉以外の個々の焼土・灰集中45カ所について、被熱層と堆積物から①灰が主体のもの（灰集中）、②灰と焼土が主体のもの、③焼土が主体のものに分けられる。これらが集中する範囲4カ所を焼土群としてまとめた。すべての焼土群において大木の根がはったような跡があり、樹木付近に選地したモノ送り場と考えられる遺構である。焼土群1・3・4は2~3カ所の焼土（灰集中）で構成され、径が2mを超える②が主体である。一方焼土群2は③径50cm程度で被熱層が2cm前後の焼土が多いものの、主体は①灰集中で、UFP-33・34は径1m以上・厚さ10cm以上の灰が堆積している。灰の中からは多量の動物遺存体が含まれるほか、鉄片・火打石片・漆の塗膜など平地住居跡の炉や周辺と同様の遺物が出土しており、密接な関係がある。また焼土群2・3の範囲にはカワシンジュガイの集中箇所がある。内側を上にしてまとめて捨てた（置いた）ように観察できるものが多い。

#### (3) 出土遺物の特徴

礫（棒状礫・焼礫含む）約450点、火皿1点、金属製品80点（破片で160点）ガラス玉7点、漆器（塗膜のみ）が出土した。またカワシンジュガイをはじめ、多量の動物遺存体が含まれていた。

・礫はその多くが平地住居跡、特に壁際付近から出土している。棒状礫は200点以上出土している。長さ5~6cm・幅3cm前後に大きさが整っているものが多い。意図的に大きさをそろえて集められており、編物の錘石などの用途が考えられる。またチャートや珪酸分の多い石材の礫片は火打石とみられるものが多く、それらを打ち欠いたと思われる細かい礫片が平地住居跡の炉から多数検出された。

・石製品として、火皿が1点出土した。千歳市トメト川3遺跡で完形品が出土している。

・鉄製品は、刀子や鉄鍋・鎌などの製品（の一部）が少数出土し、中には銅や木質を含んだ複雑な構造をもつものが見られた。しかし大部分は曲がったり折れたりした釘など小型のものである。本州からもたらされたであろうこれらの鉄片を利用して、小規模な製鉄作業が行われたことが考えられるが、調査区内でそのことを示す鍛冶遺構などの施設は検出されなかった。

このほか、刀装具や装飾的な留め金と推察される銅製品、古銭が2点（北宋銭1点・明銭1点）ガラス玉9点、漆器の一部など、装飾品とみられる遺物がわずかに出土している。

・動物遺存体は、平地住居跡の炉や焼土群、特にその上面や灰層から2kgに及ぶ量が出土した（フローテーション回収含む）。哺乳類・鳥類・魚類・甲殻類・貝類など多様である。哺乳類のうちシカの角や四肢骨が平地住居の東側から出土しており、屋外での儀礼をうかがわせる。魚類は特にサケ科・コイ科（主にウグイ）が多く、椎骨がつながった状態で検出されたものもあった。頭部から尾部まで各部位がみられ、盛んに消費していたことが伺える。貝はカワシンジュガイ（殻皮）が多量に出土している。またエゾバイ科やタマキガイ科、チシマフジツボといった、淡水産以外の貝や甲殻類が含まれており、千歳川やオサツトーなど周辺で捕獲できうる魚介類以外のものも少量得られている。

・植物遺存体について、フローテーション法により多量の炭化種子を回収し、同定を椿坂泰代氏に依頼した（VII章-3）。その結果、栽培植物ではイネのほかアワ・ヒエ・シソ・アサが検出され、擦文期にはよくみられたオオムギ・コムギが検出されなかったということである。このことは、近年周辺遺跡での発掘調査によって得られたアイヌ文化期の資料と同様の組み合わせであるという（ただしオルイカ2遺跡ではキビは検出されていない）。イネは主な平地住居跡（2・5・8）の炉や焼土群2の灰集中（UFP-34）などからわずかに出土しているが、形態的に変異幅が大きく、多種のものが少量ずつ得られていたようである。また穀物がデンプン化したとみられる炭化物がやや多量に同定されている。これらは乾燥作業やカムイノミなどの儀礼的行為において炉に入ったと推察される。

表VIII - 2 アイヌ文化期平地住居跡検出例(炉あり)

市 町 村	遺跡名	遺構名	構築面	規模				長軸方位	柱穴		炉			備考	
				主体部		付属部			本数	柱穴		形状	堆積層		
				長軸 (m)	短軸 (m)	単位	長軸側 (m)	短軸側 (m)		構築方法	数				
オルイカ2遺跡 (2003・2005)	平地住居跡1	Ta-a下	4.1	3.9	4×2	2.2	1.7	N-74°E	11	4	打ち込み	1	楕円形	炭・灰・焼土	炉炭325±25yBP
	平地住居跡2	Ta-a下	4.8	4.7	4×3	3.3	3.6	N-90°E	16	8	打ち込み	1	隅丸長方形	炭・灰・焼土	炉炭380±40yBP
	平地住居跡3	Ta-a下	3.8	3.3	3×			N-83°W	5		打ち込み	1	楕円形	焼土	炉炭320±40yBP
	平地住居跡4	Ta-a下	3.7	3.7	3×	2.3	3.6	N-80°E	6	3	打ち込み	1	楕円形	灰・焼土	炉炭270±25yBP
	平地住居跡5	Ta-a下	4.6	4.2	3×3	2.8	2.6	N-85°E	11	4	打ち込み	2+2	楕円形	炭・灰・焼土	炉炭380±40yBP
	平地住居跡6	Ta-a下	7.3	6.6	6×5	3.6	3.4	N-80°E	17	7	打ち込み	1	(不整形)	灰・焼土	
	平地住居跡7	Ta-a下	5.2	5.1	4×5	(3.7)		N-58°E	16	(2)	打ち込み	1	隅丸長方形	炭・灰・焼土	炉炭315±25yBP
	平地住居跡8	Ta-a下	7.4	7.0	5×5	3.6	3.4	N-79°W	22	5	打ち込み	2+2	長方形・楕円形	炭・灰・焼土	炉炭350±25yBP
	平地住居跡9	Ta-a下	3.3	2.6	3×3			N-86°W	11		打ち込み	1	楕円形	炭・灰・焼土	
オルイカ1遺跡 チブニ-2遺跡 (2004)	USD-1	Ta-a下	4.4	3.4				N-62°E	5			2	楕円形	灰・焼土	
	UH-1	Ta-a下	3.3	2.9				N-10°E	5		打ち込み	1	楕円形	焼土	青磁碗
梅川4遺跡 (2002)	UH-2	Ta-a下	4.5	3.3				N-50°E	6		打ち込み	1	楕円形	焼土	
	建物跡2	Ta-a下	4.0	3.8	3×3			N-57°W	13		打ち込み	1	おおむね隅丸長方形	炭・灰・焼土	
	建物跡3	Ta-a下	4.0	3.5	3×3			N-58°W	11		打ち込み	1	楕円形	炭・焼土	建物跡4より古い
	建物跡4	Ta-a下	4.4	3.9	3×3			N-57°W	11		打ち込み	1	楕円形	炭・焼土	建物跡3より新しい
トメト川3遺跡 (2004)	建物跡5	Ta-a下	5.6	5.1	6×6			N-80°E	21		打ち込み	1	楕円形	炭・焼土・灰	
	1号平地住居跡	Ta-a下	8.5	6.3	6×5	4.2	3.2	N-73°W	20	10	打ち込み	2	おおむね隅丸長方形	炭・灰・焼土	唐津擂鉢
	2号平地住居跡	Ta-a下	9.0	6.3	7×5	2.7	4.0	N-88°E	21	5	打ち込み	2	楕円形	炭・灰・焼土	炉炭510±40yBP
	3号平地住居跡	Ta-a下	6.0	5.4	5×5	3.1	2.7	N-87°E	18	9	打ち込み	(2)	おおむね隅丸長方形	炭・灰・焼土	1号より古い
	4号平地住居跡	Ta-a下	6.0	6.4	4×5	3.2	4.0	N-84°E	17	9	打ち込み	(2)	楕円形	炭・灰・焼土	2号より新しい
オサツ2遺跡 (2002)	5号平地住居跡	Ta-a下	4.0	4.2	4×5	2.5	2.5	N-68°W	16	7	打ち込み	3	長方形	炭・灰・焼土	炉の周囲に満
	1号平地住居跡	Ta-a下	8.2	(5.3)	6×5	3.9	3.3	N-80°W	11	7	打ち込み	2	楕円形	炭・灰・焼土	炉種300±30yBP
	2号平地住居跡	Ta-a下	7.3	5.8	4×5	3.4	3.2	N-22°W	18	7	打ち込み	2	おおむね隅丸長方形	炭・灰・焼土	炉種370±30yBP
	3号平地住居跡	Ta-a下	6.7	6.0	5×5	3.4	2.9	N-87°W	18	7	打ち込み	2	楕円形	炭・灰・焼土	
	4号平地住居跡	Ta-a下	6.8	5.8	5×5	3.2	3.4	N-72°E	19	7	打ち込み	(2)	おおむね隅丸長方形	炭・灰・焼土	炉種290±30yBP
	5号平地住居跡	Ta-a下	5.4	(3.7)	5×5	3.5	(2.3)	N-70°W	11	5	打ち込み	2	楕円形	炭・灰・焼土	
	6A号平地住居跡	Ta-a下	8.0	5.8	6×5	(2.8)	(2.8)	N-80°W	15	1	打ち込み	1+1	楕円形	炭・灰・焼土	
	6B号平地住居跡	Ta-a下	(3.5)	3.6	(3)×3			N-29°E	7		打ち込み	1	おおむね楕円形	灰・焼土	
ユカンボシC2遺跡 (2002)	7号平地住居跡	Ta-a下	4.8	4.6	3×3	2.7	2.5	N-48°E	12	6	打ち込み	1	楕円形	炭・灰・焼土	
	51号平地住居跡	Ta-a下	4.2	4.0	3×3			N-72°E	10			(2)	おおむね隅丸長方形	炭・灰・焼土	炭化材多量
	52号平地住居跡	Ta-a下	4.7	(3.3)				N-75°W	11			(2)	おおむね隅丸長方形	炭・灰・焼土	
	53号平地住居跡	Ta-a下	6.3	4.8		2.8	(1.9)	N-79°W	12	5		(2)	おおむね隅丸長方形	炭・灰・焼土	
	55号平地住居跡	Ta-a下	5.9	(4.1)	*5	3.1	(3.1)	N-60°W	12	5		(7)	隅丸長方形	炭・灰・焼土	長大な炉
ユカンボシC15遺跡 (1985・1996)	H-1	Ta-a下	12.0	6.5	3×2			N-78°E	10			2	楕円形	灰・焼土	
	掘立列-8	Ta-a下	(3.4)	4.0	*4			N-29°W	10			1	楕円形	灰・焼土	
	掘立列-9	Ta-a下										(3)	楕円形	灰・焼土	
カラインバ1遺跡 B地点 (2005)	建物跡12	Ta-a下	(6.2)	(3.6)				N-88°W	8			2	長椭円形	灰・焼土	
	1号建物跡	Ta-a下	6.6	5.3	4×5	3.3	2.7	N-60°W	18	8	打ち込み	1	ほぼ円形	灰・焼土	
	2号建物跡	Ta-a下	5.8	5.0	4×5	2.9		N-73°W	18	4	打ち込み	1	ほぼ円形	焼土	
カラインバ1遺跡 C・E地点 (2005)	3号建物跡	Ta-a下	5.4	4.9	4×5	3.3	3.1	N-58°W	21	9	打ち込み	1	不整楕円形	焼土	
	AH-1	Ta-a下	8.0	5.7	*5			N-61°W	14			3	楕円形	灰・焼土	焼土広範囲
	AH-3	Ta-a下	(6.0)	5.5	4×5			N-60°W	9		打ち込み	3	ほぼ楕円形	焼土	内部柱穴多数
	AH-4	Ta-a下	6.5	5.2	4×4			N-84°W	18		打ち込み	4	楕円形・不整形	灰・焼土	焼土多数
カラインバ2遺跡 III・IV・V地点 (1998)	AH-5	Ta-a下	8.6	6.0	6×5	6.1		N-50°W	23	10以上	打ち込み	2	不整楕円形	焼土	付属柱穴多数
	AH-5	Ta-a下	6.6	4.9	6×5			N-37°E	21		打ち込み	3+1	不整楕円形	炭・焼土	炭化材多量
	AH-9	Ta-a下	5.7	4.5	3×3			N-86°E	10		打ち込み	1	楕円形	炭・焼土	
	AH-20	Ta-a下	4.8	4.2	3×			N-12°W	8		打ち込み	1	不整楕円形	焼土	
	AH-37	Ta-a下	5.6	4.7	4×5			N-78°W	21		打ち込み	1	楕円形	灰・焼土	建て替え
	AH-45	Ta-a下	7.7	6.1	8×5			N-60°W	27		打ち込み	1	楕円形	焼土	
カラインバ2遺跡 VI地点 (2005)	AH-47	Ta-a下	9.5	6.8	7×5			N-9°W	19		打ち込み	2	不整形	灰・焼土	
	1号建物跡	Ta-a下	5.7	4.5	3×2			N-12°W	10		打ち込み	2	不整楕円形	焼土	
	2号建物跡	Ta-a下	8.8	7.5	7×7			N-55°W	30		打ち込み	1	不整楕円形	灰・焼土	4号より新しい
	4号建物跡	Ta-a下	4.5	3.6	3×3			N-87°W	12		打ち込み	1	不整楕円形	焼土	2号より古い
	5号建物跡	Ta-a下	6.1	5.1	4×5			N-81°W	19		打ち込み	1	楕円形	灰・焼土	
	6号建物跡	Ta-a下	8.9	6.4	5×5			N-24°W	21		打ち込み	1	ほぼ円形	灰・焼土	
	8号建物跡	Ta-a下	6.9	5.6	4×5	4.2	4.0	N-76°E	18	9	打ち込み	1	不整楕円形	灰・焼土	
	9号建物跡	Ta-a下	5.9	4.8	4×3			N-78°E	14		打ち込み	2	楕円形	灰・焼土	
	10号建物跡	Ta-a下	8.1	6.3	5×5			N-72°E	20		打ち込み	3	不整楕円形	灰・焼土	
	10号建物跡	Ta-a下	5.3	4.1	5×			N-46°W	14		打ち込み	1	不整楕円形	灰・焼土	炉炭380±40yBP
カラインバ4遺跡 VII地点 (2005)	1号建物跡	Ta-a下	8.2	6.2	6×5			N-81°W	19		打ち込み	3	楕円形	焼土	
	二鳳谷遺跡 (1986)	Ta-b下	2.9	3.1	2×2	3.8	1.8	N-46°E	8	5	打ち込み	2	楕円形	炭・灰・焼土	重複遺構有り
イルエカシ遺跡 (1989)	III H-1	Ta-b下	6.3	4.0	3×3			N-58°E	10		打ち込み	2	楕円形	灰・焼土	
	III H-2	Ta-b下	6.3	4.0	3×3			N-45°E	12		打ち込み	1	楕円形	炭・灰・焼土	
	III H-3	Ta-b下	5.1	3.5	4×			N-34°E	11		打ち込み	1+5	楕円形	焼土	
	III H-4	Ta-b下	5.4	3.6	4×2			N-69°E	23		打ち込み	1	隅丸長方形	炭・灰・焼土	16号址より新しい
	III H-10	Ta-b下	4.4	4.2	4×3	2.7	2.7	N-54°E	14	7	打ち込み	2	楕円形	炭・灰・焼土	
	1号址	Ta-b下	6.5	5.6	5×5			N-89°E	20		打ち込み	1	楕円形	炭・灰・焼土	
	3号址	Ta-b下	5.0	4.0	5×5			N-89°W	19		打ち込み	1	楕円形	炭・灰・焼土	
	5号址	Ta-b下	9.5	7.5	5×			N-89°W	19		打ち込み	3	楕円形	炭・灰・焼土	
	6号址	Ta-b下	7.5	6.0	7×6			N-10°E	20		打ち込み	1	楕円形	炭・灰・焼土	
	7号址	Ta-b下	7.5	7.0	6×5			N-69°E	12		打ち込み	1	隅丸長方形	炭・灰・焼土	
平取町	9号址	Ta-b下	4.6	3.6	3×3			N-69°E	12		打ち込み	1	楕円形	炭・灰	
	10号址	Ta-b下	4.7	4.2	3×3	1.5		N-79°E	10	3	打ち込み	1	楕円形	炭・灰・焼土	
	16号址	Ta-b下	6.6	5.1	4×5			N-5°E	18		打ち込み	1	楕円形	炭・灰・焼土	7号址より古い
	17号址	Ta-b下	3.8	3.3	3×			N-80°E	8		打ち込み	1	楕円形	炭・灰・焼土	隅に土坑・集石
	18号址	Ta-b下	10.2	7.3	7×5			N-66°E	30		打ち込み	4	楕円形	炭・灰・焼土	付属施設有?
	亜別遺跡	H-1	Ta-b下	6.5	6.4	5×6			N-46°E	20		打ち込み	1	隅丸長方形	炭・灰・焼土

そのほか野生種ではイネ科・カヤツリグサ科・アカザ属など野原・畠地・湿地の環境に生育する草本類、タラノキ属・ニワトコ属・キハダ属・ブドウ科といった落葉性の低木～小高木を主体とする木本類など、「オルイカコタン」の周辺環境がうかがえる種子が検出されている。

・平地住居跡の炉や焼土群から出土した炭化材の樹種同定を依頼した。サクラ属・ブドウ科・コナラ節・トネリコ属・クリ・モクレン属・ニレ属といった、多種の落葉広葉樹が使用されたという結果である。遺跡周辺に繁茂する比較的硬質な樹木を燃料材や建材として利用したことが推察される。

#### (4) 周辺遺跡での平地住居跡の検出例と分類・検討例

発掘調査により検出された平地住居跡や建物跡についての言及は、まず平取町二風谷遺跡の報告がある。立地や遺物とあわせて建物跡の構造を詳細に検討している（三浦正人・1986北埋調報26）。そして同町イルカシ遺跡の調査に基づく考察があり、アイヌ文化に関する記録を十分に用いて立地や建物の構造、集落の廃絶などについて検討している（豊原熙司・1989平取町遺跡調査会）。さらに恵庭市カリンバ2遺跡では40軒をこえる建物の跡が検出され、分類を行った上で用途が検討されている。「打ち込みの柱穴による建物」と「掘立柱建物跡」に大別し、柱穴の数の違いからA・B・C群に分類し、さらに細分を行っている（上屋真一・1998恵庭市教育委員会）。一方小林孝二氏は、近世～近代資料を用い、建築学的な面から住居に関する検証と成立過程を考察している（小林2000・2002）。多くの「地上柱穴列遺構」をa.4本柱列型・b.6本柱穴列型・c.9本柱穴列型、d.側柱穴型、e.内柱穴型に分類したうえで検討し、住居・建物の配置や構造に多様性があることを強調している。

表VIII-2は、千歳市・恵庭市・平取町における近年の発掘調査によって検出されたTa-a（またはTa-b）降下以前のアイヌ文化期の遺構のうち、炉（焼土）が確認された建物の跡、つまり住居跡の可能性が高い遺構を集成した表である（「側柱穴列」であっても、削平等により炉が検出されなかつたものも除外してある）。述べるべき点は多々あるが、ここでは上記のように限定された範囲での一覧表を掲載し、特徴を例示するにとどめておく。

- ・柱穴の配列はそのほとんどが打ち込み杭による「側柱穴型」（小林2000）である。
- ・規模は母屋の長軸が2.9～12.0mとさまざまであるが、4～6mと7～9mが多い。
- ・「セム」はほとんどの平地住居跡にある遺跡と少数ある遺跡、ない遺跡があり、多様である。
- ・方位について、遺跡内でおおむね東西を長軸とする平地住居が多い中、異方向が少数含まれる遺跡が目立つ。また東西正方位から大きく外れる住居跡ばかりの遺跡もある。これらは立地・時期・全体配置など個々の遺跡について検討する必要がある。

・表において「単位」としたものは、補助的な柱穴を除いた上での柱間の数である（一部推定）。長軸側は3～7単位で必ずしも規模相応ではない。一方短軸は柱間距離が短く（特に中央部）3単位あるいは5単位が多い。上屋構造建築の手順や「神窓」の設置に大きくかかわるものと思われる。

・炉は厚い灰を蓄えた焼土が多いが、焼土のみのものも少数見受けられる。また平地住居内に1ヶ所に限らず、複数存在するものも多い。その場合、規模・形状・堆積層が異なるものがほとんどで、何らかの役割の違いがあることが考えられる。

擦文時代以来の住居の変遷過程を考慮するならば、4本柱穴をはじめ、他の配列や炉のない（残存していない）建物の跡についても住居としての検討を行う必要がある。ここでは炉のある住居としての建物跡に限定した資料についてのみ掲載したが、多様である平地住居にもその構造や配置にある程度の類似点があり、技術的・精神的共通性をうかがい知ることができるとともに、厳格に規定されるわけではない環境を考察することが課題である。（阿部）